

Title	歴史の表象/表象の歴史：アメリカ文化研究と集団的記憶の再構築
Sub Title	Representation of history/history of representation : American cultural studies and the reconstruction of collective memory
Author	鈴木, 透(Suzuki, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.171(210)- 187(194)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史の表象／表象の歴史 ——アメリカ文化研究と集団的記憶 の再構築

鈴木 透

1. はじめに

文学研究と他の人文科学分野との境界線が次第にぼやけてきているという傾向は、アメリカ文学研究に携わる人々の多くが認めるところであろう。こうした傾向は、文学研究という固有の領域の危機であるとの見方もあるだろうが、アメリカ文化研究という観点からすれば、決してマイナスを意味するものではない。なぜなら、いわゆる狭義の文学作品だけに目を向けるのではなく、テクストとして読むことの可能な事象へと研究対象を拡大し、他の分野と連携していくことは、アメリカという国の特質をより明らかにするための重要な手掛けりを提供してくれる可能性を秘めているからである。

しかし、そもそも、アメリカ文学研究からアメリカ文化研究へといふべき、このような転回を可能たらしめたものは何だったのだろうか。そこには、およそ二つの背景が存在しているように思える。一つは、ディコンストラクション以降の文学研究の方法論上の議論において、歴史的要素に対する再接近がはかられたという点である。もう一つは、昨今のアメリカにおける歴史研究のあり方自体が、従来見過ごされがちだった資料に新たな光を当てようとしてきたことである。つまり、文学研究と歴史研究の双方が、折しもほぼ時を同じくして、アメリカの歴史に対する新しい関わり方を模索し始めたことが、双方の境界線の壁を低くし、アメリカ文化を広く見渡せる地平を切り開く結果となつたと考えられるのである。

そこで小論では、アメリカ文化研究という視点に立って、文学研究と歴史研究の双方が打ち出してきている、アメリカの歴史に対する新たな関わり方の持つ意味を改めて整理した上で、社会の様々な局面での分裂化傾向の危機が叫ばれている今日のアメリカ社会の現状に照らして、アメリカ文化研究が今後どのような方向性を打ち出すべきなのか、いくつかの注目すべき研究事例に言及しながら考察を加えたいと考える。そして、歴史を表象することの持つ政治性を意識しつつも、表象の歴史を解明するという作業を継続していくことが、非WASP多数派時代への秒読み段階に突入していくであろう21世紀のアメリカにおいて、新たな国民的価値観の構築という観点からいかなる意味を持ちうるのか考えてみたい。

2. 転機としての新歴史主義と歴史考古学——「歴史」への新たな眼差しとアメリカ文化研究の活性化

アメリカにおける文学研究と歴史研究との接近は、アメリカ文化研究という領域に重要な血液を送り出す役割を演じてきている。こうした傾向の発端となったのは、文学と歴史双方の領域において、アメリカの歴史に対して新たな眼差しが向けられたことだった。文学研究の領域における新歴史主義（“New Historicism”）の登場と、歴史研究の領域における歴史考古学（“Historical Archaeology”）の台頭は、そのことを象徴する出来事だったといえる。

ニュークリティシズムからディコンストラクションに至るまで、文学批評理論においては、歴史的要素は軽視されてきた。ニュークリティシズムは、文学作品を自己完結的な有機体に見立て、その内部の構造と関係性に目を向けることに専念しようとした。この傾向は、ニュークリティシズムの主要な理論家が、アメリカ南部の出身だったこととも関係していた。19世紀後半以降、北部が目ざましい経済発展を遂げた一方で、後進的な農業地域のままであった南部の保守勢力は、北部の産業主義に吸収されて南部人としてのアイデンティティーが崩壊することを恐れていた。それ故、彼らは、産業社会の根底にある科学とは対極に位置するものとして文学を捉

え、文学的知を持って北部産業社会と対自しようとしたのである。専ら作品の内部のみに目を向け、作品の背景などの歴史的要素を全て排除しようとするニュークリティシズムの発想は、北部という外部からの影響を遮断し、南部の自律性を確保しようとした南部保守勢力の思考様式と軌を一にしていた。

しかしながら、ニュークリティシズムの武器であった、比喩や多義性といった道具は、作品の内部で機能するだけでなく、作品外部への参照性を秘めている。それ故、ニュークリティシズムが内包していた修辞学的傾向は、作品という自己完結的な概念に代わって、開かれた言語的構築物としてのテクストという概念を浮上させ、ニュークリティシズムの理論家たちの意図とはうらはらに、むしろテクストとして文学を読むことの可能性を秘めていた。そして、こうした開かれた存在としてのテクストにおいては、比喩や多義性というまさに言語が抱える意味決定不能性の宿命故に、ニュークリティシズム的な有機的で自己完結的な文学空間がいかに自己解体しうるかを示そうとしたのが、1970年代のディコンストラクション批評であった。

ディコンストラクション批評は、作者や作品の歴史的背景を軽視する点ではニュークリティシズムと似ていたが、文学作品を特殊な言語的構築物とは捉えないという点で大きく異なっていた。言語の持つ意味決定不能性は、言語的構築物一般に関わる問題であり、比喩という観点からは、文学と非文学を区別することは厳密にはできないというのがディコンストラクションの立場であった。このことは、もしニュークリティシズム以来の文学研究の中心的課題の一つがレトリックにあるのだとしたら、その研究対象を文学と呼ばれる一部のテクストに限定しなくてはならない必然性が必ずしもないことを示唆するものだった。

ディコンストラクション批評が提起していたもう一つの問題は、字義的な意味とレトリカルな意味との間の意味決定不能性の直接の原因が言語にあるとしても、こうしたレトリカルな表現を成立せしめるのは何かという点だった。ある言い方が、字義的な意味を離れてレトリカルな意味を持

ち、人々の間で了解されるようになるには、複数のテクストを経由していくはずだ。そして、どこか特定のコンテクストにおいて、その表現はレトリックとしての骨格を整えることになるはずである。とすれば、レトリックの研究は、テクストのみに終始すべきではなく、そのテクストの「コンテクスト」をも視野に入れていかなくてはならない。

こうした、ディコンストラクション批評が内包していた、文学と非文学の区別の撤廃やテクストからコンテクストへの志向は、ニュークリティシズム以来文学の周辺として見られてきたものへの関心を呼び覚ますことになった。そして、そうした方向性を吸収する形で80年代に登場してきたのが、新歴史主義であった。文学研究における旧来の歴史主義的なアプローチは、作家の意図や作品の偉大さを証明する道具として歴史的要素を利用しようとしてきた。これに対して新歴史主義は、特定のものの言い方や思考様式が複数のテクストの連携によっていかに形成されるのかに焦点を当てようとする。それ故、新歴史主義においては、文学を含む多種多様なテクストが研究対象となるとともに、それらのテクストの生産、流通、消費がいかなるコンテクストの下に行われ、特定の発想が社会の中でいかにして網を広げていったのかが重要な関心事となる。その意味では、新歴史主義は究極的にはその社会を覆う「知」の歴史の一端を明らかにしようとしているのであり、Stepehn Greenblatt の言葉を借りれば「文化の詩学」というべき性質を備えているのである。

また、新歴史主義の登場は、文学史という概念を大きく揺さぶることにもなった。新歴史主義は、文学の歴史という閉じた歴史を追求するのではなく、様々なテクストの関係性の下に文学の歴史を引きづり出そうとした。実際、80年代後半以降のアメリカにおける、いわゆる文学史の再構築の試みは、新歴史主義が提起したのと同様の問題意識を共有していた。Emory Elliott 編の *Columbia Literary History of the United States* (1988)において、先住民族の口承伝承からアメリカ文学の歴史の発端が語られるなど、マイノリティーのテクストに関する言及が以前になく加えられたり、社会史や文化史との接点が模索されているのは、こうした傾向

の一つの現れといえるだろう。また、Russel Reising の *The Unusable Past : Theory and the Study of American Literature* (1986) は、いわば文学史の歴史という観点からアメリカ文学研究の再検討を試みた著作と位置づけることができる。そして、アメリカ文学の歴史をいかに表象すべきかという問題意識は、文学科という制度の歴史的検証にも波及しただけでなく、ニューアメリカニズムやポスト・コロニアルな批評へと継承されていくことになる。

一方、アメリカ文学研究が文学研究における歴史的要素に再接近し、アメリカ文学の歴史をいかに表象すべきかという問題の再検討へと踏み出していった間に、アメリカの歴史研究においても、新たな潮流が芽生えてきた。その重要な発端となったのは、考古学的手法のアメリカ史研究への導入であった。従来アメリカにおいては、考古学は人類学の一部に組み込まれ、先史時代を研究する学として位置づけられてきた。そのため、アメリカ合衆国の歴史を研究するという視点からすれば、先史時代のインディアンの研究以外には考古学とアメリカ史研究との接点はほとんど存在しないと考えられてきた。ところが、1960年代以降、文献記録の存在する時期のアメリカ史研究にも考古学的手法を活用しようとする動きが見られるようになり、それは歴史考古学という新たな学問領域へと発展していったのである。

こうした動きの先駆的存在として挙げられるのが、James Deetz の業績である。歴史考古学者としての彼の重要な出発点となっているのは、18世紀のアリカラ・インディアンの土器の研究である、*The Dynamics of Stylistic Change in Arikara Ceramics* (1965) である。ここで彼は、先史時代のインディアンへと関心を向けてきた考古学の常識を覆し、18世紀という、文献記録の存在する時代のインディアンの分析に土器という考古学的資料を用いるという方法をとった。そして、アリカラ・インディアンの土器の文様の変遷が、ヨーロッパ人との接触に伴う、アリカラ・インディアンの周囲の環境の変化や社会構造の変化とどう関係していたのかを、ヨーロッパ人の側の記録と突き合わせることによって解明しようと試みた。

土器という考古学的遺物は、文字記録のない時代の研究材料としては認識されてきたが、文献記録の残っている時代の研究においても貴重な資料となることを彼はここで証明してみせたのである。

その後 Deetz は、文献記録を柱とした歴史研究と、遺物や痕跡を軸とした考古学的手法とを組み合わせた歴史考古学のアプローチを、インディアン以外のアメリカ史にも広げようとした。こうした彼の意図が如実に反映されていたのが、現在アメリカにおいて歴史考古学の古典と位置づけられている、*In Small Things Forgotten : An Archaeology of Early American Life* (1977) である。この中で彼は、文献記録と考古学的資料が歴史解釈において相互補完的存在であることを強調するとともに、これら二種類の資料から植民地時代のアメリカの生活環境をいかにして再構成することができるかを論じている。財産目録や法律関係の記録などの文献資料と、発掘された家の礎石からわかる間取りや、ごみ捨て場の跡から出土した遺物からわかる食習慣、墓に刻まれたデザインから読み取れる精神世界など、物的資料が教えてくれる情報を結びつけようとする彼の手法は、文献記録や考古学的資料のどちらか一方だけでは接近しきれない、植民地時代の生活空間を描き出すことに成功している。

Deetz のアプローチで注目されるのは、文献記録の残っている時代のアメリカ史の解明にも考古学的資料が有効だという点を示しただけではない。彼が研究材料にしたのは、決して国宝級の考古学的資料というわけではなく、庶民の生活の痕跡を止めた物的資料であった。つまり、彼の手法は、自ら積極的に文献記録を残さないかもしれない人々の歴史をどう解釈するかという問題に重要な示唆を与えるものでもあったのである。例えば彼は、*In Small Things Forgotten* の中で、Massachusetts 州の Plymouth 近郊にある Parting Ways 遺跡に着目し、そこで明らかにピューリタンの住居とは異なる様式の住居跡が発見されたことを取り上げている。そして、文献資料から、そこには Cato Howe という名の黒人が居住し、年金を受け取るなどアメリカ社会の中で一定の地位を確保していたらしいことを突き止めるとともに、その家の礎石が示す建築様式が、西アフリカに起

源を持ち、奴隸貿易の拡大とともに西インド諸島のハイチなどに伝えられた、ショットガン・ハウスと呼ばれる様式と似ていることを指摘し、植民地時代のアメリカに渡ってきた黒人がアメリカ社会に組み込まれながらも、アフリカ起源の独自の文化的伝統を保持していた可能性について言及している。こうした彼の手法は、文字記録を残す可能性の少ない立場にある人々の過去の生活世界を明らかにする上で、歴史考古学的アプローチがいかに大きな武器となるかを如実に示しているといえる。

庶民の残した物的資料が決して無価値でないばかりか、むしろ、それらを通じてこそ解明できる歴史があるという Deetz 流の歴史考古学の問題提起は、従来のいわゆるアメリカン・スタディーズの側にとって非常に刺激的である。アメリカン・スタディーズは、アメリカにおけるアメリカ文化研究の主要な舞台となってきたわけだが、そこでこれまで唱えられてきたのはインテレクチュアル・ヒストリーの重要性であった。しかし、インテレクチュアル・ヒストリーの研究は、領域横断的に行われながらも、どちらかというとインテリの残した文献に比重を置き、そこからアメリカ的知を炙りだすという手法を取りることが多かった。もっとも、こうした傾向に対して、アメリカン・スタディーズの側が全く無自覚だったわけではなく、インテレクチュアル・ヒストリーと並んで大衆文化研究も盛んに行われてきた。しかし、大衆文化研究は、インテレクチュアル・ヒストリーの盲点を補正する意味を持つとはいえる、しばしば大衆文化のイコンとなるような著名な人物を軸に展開され、歴史の中に埋もれていく大衆そのものを大きくクローズアップしようとしていたかというと必ずしもそうとはいえない面もあった。その意味からすれば、名前も顔も判然としない庶民の残した物的資料を研究対象に加えるという歴史考古学的な発想は、ややもするとアメリカを代表すると目される文献や人物の研究に偏りかねない傾向を秘めてきたアメリカ文化研究に、アメリカ的知や創造力をより大きな視野から捉える視点を提供するものといえよう。

こうした歴史考古学の発展は、アメリカ国内に様々な動きを生み出している。現にアメリカでは、いわゆる“Living History Movement” や

町並み保存運動が盛んとなり、過去の庶民の生活様式、生活空間、生活用具等の復元・再現に対する関心が高まってきている。また、こうした作業に必要な専門家を養成するための歴史保存学（“Historic Preservation”）の講座も全米の大学に広がってきており、建築や美術などの文系の領域と、保存技術に関する理工系の領域、及び、保存という行為をいかに促進し、その持つ意味を社会にいかに還元するかに関する社会科学の領域を組み合わせた、極めて学際的な学問分野として定着しつつある。更に、「モノ」（“artifact”）から得られる情報をアメリカ史研究に積極的に生かすという発想は、最近のアメリカにおける歴史考古学的な物質文化研究の隆盛にも着実に反映されている。例えば、大航海時代の地図から自動車文明が生み出した道路脇の看板に至るまで、幅広くアメリカ史の中の「モノ」を再解釈しようとしている Mark P. Leone と Neil Asher Silberman 共編の *Invisible America : Unearthing Our Hidden History* (1995) などは、その代表的存在といえるだろう。そして、こうした歴史考古学的な物質文化研究においては、文献資料だけからでは判然としない過去の歴史をいかに解明するかという課題が、過去の風景（“landscape”）の再構成の問題として意識されるようになってきている。文献には記録されにくく過去のアメリカの生活空間を物的資料によって補い、過去の時代の知のあり方を探ろうとする姿勢がそこには感じられる。

このように、文学研究と歴史研究の双方において、歴史に対する新たな関わり方がどのように昨今のアメリカでは芽生えてきたのかを改めて振り返ってみると、両者が類似の方向性を共有していた様子が見えてくる。即ち、そこには、多種多様な資料を基に、特定の種類の資料だけからでは確認しにくいような歴史的コンテクストを再構成し、そのコンテクストに具現化された文化的知を炙り出そうとする姿勢を共通して見ることができる。それは、アメリカ文学史やアメリカ史といった、従来の歴史の提示のあり方が、一部の資料だけに基づいた一面的な提示である可能性を提起し、歴史の表象のあり方の再検討を迫るだけでなく、歴史的コンテクストの再構成こそがアメリカ文化研究の新たな重要な出発点になりうること

とを示している。アメリカ文学研究とアメリカ史研究とが、アメリカ文化研究としての枠組みの中で接点を結ぶという構図は、こうして出来上がってきたと見ることができるのである。

3. 分裂の危機の時代の集団的記憶

——愛国主義研究の新たな展開

アメリカ文学研究とアメリカ史研究の双方において、従来の歴史の提示方法の見直しがはかられるようになったという経緯は、アメリカ史の中の知られざる側面を浮上させ、アメリカ的知に関するより総合的な研究に道を開くものであり、アメリカ文化研究を活性化する可能性を秘めている。しかも、こうしたアメリカ文化の再検証というべき方向性は、アメリカ社会の置かれた現状と将来を見据える時、更に意義深いものに思えてくる。というのも、今後のアメリカにとっては、いかに新たな国民的価値観を創出するかという問題が極めて重要になってくると考えられるからである。

昨今のアメリカ社会が抱えている重要な問題の一つは、社会の様々な局面における分裂化傾向である。90年代に入って貧富の差がかえって拡大しているという経済的格差の問題だけではなく、現代アメリカ社会には様々な文化的対立が渦巻いている。マルチカルチャリズムには、自民族中心主義を同時多発的に生み出す危険が潜んでいるし、妊娠中絶や同性愛などの性をめぐる考え方の違いも人々の間に軋轢を生じさせている。その上、現代アメリカでは、人種対立・民族対立の構図も複雑さを増している。アフロアメリカン・アクションの廃止には、一部の中産階級の黒人たちも賛成しているし、バイリンガリズムの問題をめぐっては、ヒスパニックとそれ以外のマイノリティーとの間で足並みはそろっていない。60年代以降、アメリカ社会は、完全とはいえないまでも、マイノリティーの権利の向上に取り組んできた。しかし、その結果として数多くの権利主張が交錯するようになった今日、これまでアメリカ社会の基盤と考えられてきた価値観が大きく揺さぶられ、分裂の危機をいかに收拾すべきかという問題が浮上してきているのである。

しかも、分裂の危機という火種を抱えたアメリカには、折しも大きな変化が忍び寄ってきてている。それは、人口構成の着実な変化であり、出生率の高いアジア系やヒスパニックの人口増加が予測されることから、21世紀の半ばには非 WASP の人口が過半数を占めるようになると考えられている。となると、分裂の危機を旧来の WASP 中心主義的な価値観に回帰して切り抜けるのは、明らかに限界があるようになると思える。その意味では、アメリカは、きたるべき世紀における人口構成の変化に対応可能な、新たな国民文化を作り出すべく、アメリカ文化の再検討という課題に着手すべき時にきているのである。

従って、アメリカ文学研究とアメリカ史研究の双方が、歴史をいかに表象すべきかという共通の問題に関心を寄せ、アメリカ文化研究の活性化の契機を作る役割を果しているという事態は、アメリカ社会が置かれた状況からすれば、歓迎すべき兆候といえよう。そして、今後のアメリカ文化研究に期待されるのは、分裂の危機を回避して、きたるべきアメリカ社会の変化に柔軟に対応しうる新たな国民的価値観の基盤作りに貢献できるような、いかなるヒントを過去の知られざる歴史の再構成という作業の中からすくいとるかということであろう。ここで注目されるのは、こうした方向性を射程に収めた研究が最近相次いで発表されるようになってきているということである。その好例は、集団的記憶の再検討を試みた最近のいくつかの研究である。

もっとも、集団的記憶は、Benedict Anderson の *Imagined Communities* (1983) に見られるように、これまで研究者たちの関心を引いてこなかったわけではない。しかし、強いアメリカへの郷愁が顕著となった1980年代のレーガン政権以降、湾岸戦争、更には、1995年のスミソニアン博物館でのエノラ・ゲイの展示をめぐる論争など、アメリカ国内では、愛国主義的な風潮を再燃させる契機が繰り返し訪れたことは、集団的記憶の問題と愛国主義とを関連づけようとする動きに弾みをつけたといえよう。こうした背景の中から登場してきた著作として興味深いのは、John Bodnar の *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and*

Patriotism in the Twentieth Century (1992) である。移民労働者を中心としたアメリカ労働史研究に従事していた Bodnar の研究歴からすると、このタイトルは唐突な印象を与えるかもしれない。だが、この著作には、労働史という歴史の研究に携わってきた研究者が、歴史をいかに表象するかという問題から更に一步踏み込んで、ある歴史が公の歴史として選択され表象される過程がどのようなものなのかへと分析を進めるべく、愛国主義という研究対象へと接近しようとした形跡を見ることがあるのである。

Remaking America の中で Bodnar は、公の歴史を表象する役割を持つメモリアルや祝賀行事が、どのようなアクター間の相互作用の結果として成立しているのかを取り上げている。ここで分析対象となっているのは、エスニック・コミュニティーや都市における記念行事といったミクロのレベルから、州政府が関与した公式行事、更には内務省国立公園局の活動といった、より広い地域にまたがるマクロの次元まで、実に幅広い範囲に及んでいるが、Bodnar が一貫して着目しているのは、これら一連の “commemoration” という行為においては、文化的なエリートと “vernacular” な民衆勢力との間で常に様々な駆け引きが行われてきているという点だ。記念行事においては、文化的エリートは、しばしば自らのヘゴモニーと社会に対する貢献度とを誇示しようとするし、郷土の英雄や歴史が大きく取り上げられることを望む住民もいれば、マイノリティーは自分たちの存在をアピールする絶好の機会として利用しようとするといった具合だ。彼の分析によれば、こうした様々な思惑の交錯は、いわば多様な利害の調整の産物としての愛国主義を浮上させることになる。そして、愛国主義的な記憶を集団で共有しようとする傾向は、地方の行事においても顕著に見られるだけでなく、二度の世界大戦や冷戦を契機として、20世紀を通じて強まっている点を彼は指摘する。しかし、同時に彼は、愛国主義といった大それた発想からではなく、個人的な記憶を記念する場を求めるとする “vernacular” な欲求も完全に封じ込められてはいないとし、そのことを表す典型的な存在として Vietnam Veterans Memorial (ベトナ

ム戦没者追悼記念碑）の例を挙げている。

もっとも、Bodnar の分析に問題点がないわけではない。彼が取り上げているサンプルは中西部に集中しているし、言及されているマイノリティも、スエーデン系やアイルランド系など専らヨーロッパ系の移民である。しかし、彼が文化的なエリートが公式の記憶を製造しようとするに対する嫌悪感を示す一方で、“vernacular”な記憶が表象されることの重要性を喚起しようとしている点は重要である。集団的記憶の形成にとって、“vernacular”な記憶との対話が今後とも不可避であるとすれば、“vernacular”な記憶は愛国主義的な公式の記憶の中身を修正する存在となるはずだ。アングロ・サクソン系が大多数を占める Indianapolis と、東ヨーロッパ系の移民が重要な労働力となっていた Cleveland という人口構成の異なる都市において、いかに記念行事のあり方に違いが見られたかについての彼の分析は、このことを示唆している。Clevelandにおいては、祝賀行事の中でそれらの移民の存在を無視することができず、そのことが結果的にリトニア系やドイツ系といった移民ごとに区画を割り当てた “Cleveland Cultural Gardens” の設置につながったという経緯は、集団的記憶の表象が今後の人口構成の変化からも影響を受けるであろうことを予感させる。その意味で彼の著作は、分裂の危機の時代を乗り越えるための集団的記憶の形成にとって、“vernacular”な記憶をどう手繕り寄せるかが重要な課題になることを暗示しているといえる。

このように、Bodnar の著作は、「歴史の表象」から愛国主義の「表象の歴史」の再検討へと踏み出そうとするものであり、分裂の危機以後の時代に相応しい愛国主義の表象を作り出すにはどうすればよいのかを考える糸口を提供するものである。彼の著作が内包しているこうした問題提起は、実は別の研究者の著作にも見ることができる。しかも、こうした著作の中には、Bodnar の場合以上に「モノ」を起点にしようとする、いわば、歴史考古学的問題意識を取り込んだ物質文化研究との接点を感じさせるものが存在する。

その好例としてあげられるのは、Edward Tabor Linenthal の *Sacred*

Ground : Americans and Their Battlefields (1993) である。Linenthalは、エノラ・ゲイの展示をめぐる論争がアメリカで沸き上がった際には、Tom Engelhardtとともに *Histroy Wars : The Enola Gay and Other Battles for the American Past* (1996) を編集し、歴史を神聖化しようとする政治の力に対して歴史家は何をなすべきかという問題提起をしており、単眼的な公式の歴史のあり方に警鐘を鳴らそうとする姿勢や、歴史の表象のあり方をめぐる“History Wars”にいかなるアクターが関与しているのかに关心を寄せる点で Bodnar と共通している。だが、Linenthalの *Sacred Ground*において興味深いのは、Bodnar が祝賀行事を分析の中心に据えたのに対して、古戦場という空間装置に焦点を当てたという点である。

Linenthal がここで分析しているのは、独立戦争の聖地というべき Lexington と Concord, David Crockett を一躍国民的英雄に仕立て上げることになった Alamo 畔、南北戦争の戦局の分かれ目となり、Lincoln の演説によって国民の記憶の中に止められることになった Gettysburg, Custer 将軍率いる合衆国陸軍第七騎兵隊が Sitting Bull らの兵力の前に壊滅させられた Little Big Horn, 及び、太平洋戦争の幕開けとなった Pearl Harbor である。これらは、いずれもアメリカ人の多くに愛国主義的な感情を喚起する空間装置であるわけだが、Linenthal は、人々がこれらのメモリアルに何を表象させようとしてきたのかという、表象そのものをめぐる歴史に着目する。例えば Alamo 畔では、テキサスにおけるアングロサクソン系のヘゲモニーの象徴というべきこの表象に対して、League of United Latin American Citizens から抗議の声が上がり、テキサス共和国成立以前のカトリックの伝道所としての Alamo の側面や、アングロサクソン系住民とともに Santa Ana 率いるメキシコ軍と戦ったヒスパニック系の住民の存在をも記念するようにとの要求が出てきている。また、Custer の軍隊が壊滅させられた古戦場は、以前は Custer Battlefield という名称で国立公園局によって管理されていたが、西部開拓のために命を落とした白人だけを記念し、自分たちの住む土地を守ろうと必死に戦ったインディア

ンを記憶から抹殺するのはおかしいとの声が先住インディアンの側から上がった結果、このメモリアルの名称も Little Big Horn National Monument と改められ、管理責任者にもインディアンの女性が抜擢されることになった。このような、アメリカの愛国主義のシンボルとして受け入れてしまっているかに見えるような表象であっても、その形成過程をたどってみると、そこには Bodnar 流にいえば “vernacular” な記憶の側からの圧力が作用してきている様子が見えてくる。Linenthal の著作は、表象の歴史を検証するという作業を通じて、公式の記憶が抑圧しがちな “vernacular” な記憶をいかに空間装置の中に再表象すべきかという観点を浮上させたといえるだろう。

集団的記憶として共有されるべき公式の歴史は、行事という「テクスト」やメモリアルという「モノ」の形を取って表象されうるのであり、その表象の創出過程に着目すべきだという Bodnar や Linenthal の問題意識は、物的資料を加味したアメリカ文化の再検討という近年のアメリカ文化研究の方向性に沿うものであるとともに、分裂の危機の中で愛国主義的な集団的記憶をどのようにして再構築するかという、アメリカが直面する問題をも射程におさめている点で、高く評価されるべきであろう。現に、「モノ」と集団的記憶の関わりの問題を更に突きつめようとする研究も発表されている。例えば、Albert Boime の *The Unveiling of the National Icons : A Plea for Patriotic Iconoclasm in a Nationalist Era* (1998) は、集団的記憶の表象過程において様々なアクターが関与していることを明らかにしようとする点では Bodnar や Linenthal と共通しているが、彼ら以上に「モノ」の表象を研究対象に取り込もうとする姿勢が見られる点で興味深い。彼がこの著作の中で取り上げているのは、星条旗、Statue of Liberty、Mt. Rushmore、Iwojima Memorial として知られる Marine Corps Memorial や Lincoln Memorial などである。メモリアルに焦点を当てようとする姿勢は Linenthal を彷彿させるが、古戦場といった空間そのものというよりは、その空間装置の中に人為的に配置されている彫刻という「モノ」へと分析を進めていく様子は、「モノ」と集団的記憶との関

わりを考えるという発想が更に発展してきている様子をうかがわせる。

ただ、昨今のこれらの研究事例の価値を大いに認めた上であえて付け加えるなら、集団的記憶の表象過程という、知られざる歴史の再構成という作業は、今後のアメリカ文化をどう方向づけていくべきかという問題と密接につながっているということを研究者の側は見過ごしてはなるまい。アメリカに忍びよっている人口構成の変化は、これまで公の歴史として表象してきた集団的記憶の中身と提示方法に修正を迫る可能性を秘めている。その修正作業を、いかに更なる分裂を回避する形でなし遂げるかという問題が、そこには潜んでいる。Bodnar のいう “vernacular” な記憶の再表象という課題は、確かに避けて通れないとはいえ、いかに記憶を再構築し、集団で共有するかという課題がその先には待ち構えているのである。

4. 結語

アメリカ文学研究とアメリカ史研究の双方が歴史との新しい関わり方を模索してきた経緯を受けて、多様な資料から知られざる歴史を再構成するという作業が各方面で行われるようになった結果、アメリカ文化研究は大いに活性化されたといえる。そして、歴史をいかに表象すべきかという歴史の再提示への関心は、表象そのものの持つ歴史性の解明へと波及し、そうした表象に込められた集団的記憶の再検討へと進んできている。分裂の危機を抱え、人口構成の変化が忍び寄るアメリカの状況を考慮するならば、アメリカ文化研究の側がこうした作業を継続し、アメリカ的知や創造力のあり方を検証しつつ、新たな国民的価値観の創出へとつなげていくことが肝要であるといえよう。

アメリカ文学史の再構築へ向けた動きが活発になっていった時期、「アメリカ文学」という枠組みをめぐって様々な議論が戦わされたのは記憶に新しい。しかし、今から振り返ってみると、文学史の再構築という作業は、集団的記憶や “commemoration” という行為はいかにあるべきかという、その後のアメリカ文化研究が取り組んでいったのと共通の問題を含

んでいたように思える。実際、物的資料から過去の“landscape”を再構成し、それをいかなる目的でどのように人々に提示するかという、アメリカの歴史関係の博物館が直面している展示のあり方の問題は、どのテクストから誰のために文学史を紡ぎ上げるかという、アメリカ文学研究の課題と一脈通ずるものがある。歴史をいかに表象するかに対する問題意識の高まりが、アメリカ文学という枠組みのみならず、アメリカ文化というものの表象をも再検討の対象に引きびり出している今日、文学研究は、歴史と表象をめぐって繰り広げられているアメリカ文化研究との接点をますます広げつつある。その意味では、物的資料を開拓しつつあるアメリカ文化研究に、新歴史主義的な問題意識を経由してどのように文学研究を接続させるかという問題を、アリカ文学研究はいっそう考えるべき時にきているといえるだろう。そして、集団的記憶の再構築という目標に向けて、文学研究と歴史研究との間の敷居が現在以上に低くなっていくならば、アメリカ文化研究は更に大きな成果を上げることができるはずである。

参考文献

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London : Verso, 1983.
- Benson, Susan Porter, Stephen Brier, and Roy Rosenzweig, eds. *Presenting the Past : Essays on History and the Public*. Philadelphia : Temple University Press, 1986.
- Bodnar, John. *Remaking America : Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century*. Princeton : Princeton University Press, 1992.
- Boime, Albert. *The Unveiling of the National Icons : A Plea for Patriotic Iconoclasm in a Nationalist Era*. New York : Cambridge University Press, 1998.
- Deetz, James. *The Dynamics of Stylistic Change in Arikara Ceramics*. Urbana : University of Illinois Press, 1965.
- . *In Small Things Forgotten : An Archaeology of Early American Life*. New York : Doubleday, 1977.
- Elliott, Emory, ed. *Columbia Literary History of the United States*. New

- York : Columbia University Press, 1988.
- Fitch, James Marston. *Historic Preservation : Curatorial Management of the Built World*. Charlottesville : University Press of Virginia, 1990.
- Hunt, Lynn, ed. *The New Cultural History*. Berkeley : University of California Press, 1989.
- Kammen, Michael. *Mystic Chords of Memory : The Transformation of Tradition in American Culture*. New York : Alfred A Knopf, 1991.
- Kingery, W. David, ed. *Learning from Things : Method and Theory of Material Culture Studies*. Washington D.C. : Smithsonian Institution Press, 1996.
- Leone, Mark P., and Neil Asher Silberman. *Invisible America : Unearthing Our Hidden History*. New York : Henry Holt, 1995.
- Linenthal, Edward Tabor. *Sacred Ground : Americans and Their Battlefields*. Urbana : University of Illinois Press, 1993.
- Linenthal, Edward Tabor, and Tom Engelhardt, eds. *History Wars : The Enola Gay and Other Battles for the American Past*. New York : Henry Holt, 1996.
- Lubar, Steven, and W. David Kingery, eds. *History from Things : Essays on Material Culture*. Washington D. C. : Smithsonian Institution Press, 1993.
- Martin, Ann Smart, and J. Ritchie Garrison, eds. *American Material Culture : The Shape of the Field*. Winterthur : Henry Francis du Pont Winterthur Museum, 1997.
- Orser, Jr., Charles E. ed. *Images of the Recent Past : Readings in Historical Archaeology*. Walnut Creek : AltaMira Press, 1996.
- Reising, Russell. *The Unusable Past : Theory and the Study of American Literature*. New York : Methuen, 1986.
- Schlereth, Thomas J. *Cultural History and Material Culture : Everyday Life, Landscapes, Museums*. Charlottesville : University Press of Virginia, 1990.
- Yamin, Rebecca, and Karen Bescherer Metheny, eds. *Landscape Archaeology : Reading and Interpreting the American Historical Landscape*. Knoxville : University of Tennessee Press, 1996.